

品川支部

平成30年2月1日発行
〒141-0022
品川区東五反田1-8-5
Tel. 3442-7075

2月

天理教品川支部（豊英分教会内） 発行責任者 栗原薫 編集 支部編集部

後継者講習会 参加、まだ間に合います

昨年八月からスタートしました後継者講習会1月16日迄で、男子6309名
女子6421名合計12730名の方が受講いたしました。
当初、教会の後継者講習かとの思いでいた方が多くいらっしゃいましたが
対象がお道を受け継いで行くもの全ての20歳から40歳までの方と言う
ことで、後、残りの講習回数が少なくなりましたが、お問い合わせが多
くなって参りました。
行ってみようと思う方は、3月末まで日程がありますので、今からで
も是非、お申し込み下さい。日頃、教会では言えない様なことも、しが
らみ無く言えて共感も出来、従来より評判も良いようです。



教会系統の異なる年代別での
グループで意見交換

これからの日程

- 第19次 2月 2~4 (金土日)
- 第20次 2月10~12 (土祝月)
- 第21次 2月16~18 (金土日)
- 第22次 2月19~21 (月火水)
- 第23次 3月14~16 (水木金)
- 第24次 3月17~19 (土日月)
- 第25次 3月22~24 (木金土)



大講堂で講義を受講

☆支部行事のお知らせ

・支部例会二月二十八日(二頁参照
神名流し

一日(木)十時から、大井町駅前にて
在宅センターひのきしん

二月二十七日(火)午前九時半~十一時
三味線・お琴等お稽古受け付けます(随時)

支部内で三味線・お琴を習ってみたいという方
みかぐら歌以外のお稽古も出来ます
師匠が楽しく楽器の扱い方から教えてくれます
ので、希望の方個人でもグループでも表紙の豊英
分教会まで連絡下さい。

☆教務支庁からのお知らせ

・Better Half(ベターハーフ)結婚応援プログラム

教区では結婚応援のプログラムを新たに立ち上げる
ことになりました。

現在対象者を募集しております。登録はスマホ・PC
から人目に触れず行う事が出来、年齢や希望等に
合わせて、会を紹介して行きます。

天理教東京教区HPから簡単に出来ます。

・鼓笛バンドコンクール

第四十四回は三月二十一日(水祝日)。
会場が今回は東武東上線大山駅に近く
板橋区立文化会館に替わり行われます。

天理教との関わり



近衛秀麿



明本京静

正月号で紹介した現在教区所有「荻外荘」の主、
元首相近衛文の異母兄弟で日本のオーケストラの
草分け的な近衛秀麿と師弟であった明本京静
今期百年を迎える天理教青年会の会歌(天理高校
の校歌として甲子園でも流れる)の作者
当時はこのような皇室、又山田耕筰等の文化人
との交流もよく見られる。

天理教青年会歌作者 (作曲:近衛秀麿、作詞:明本京静)

近衛秀麿: 兄の文麿と違い、自分の信念を貫き通した
方と言われる。戦後に至るまで欧州で政府音楽大使として
各国で指揮を行った。ナチスの言いなりにならず兄を困ら
せた事、多くのユダヤ人音楽家を国外逃亡の助けをし、
杉原杉原千畝と並んで賞される等NHKBS1でも放映された
が、日本のオーケストラの草分けとして知られる。

明本京静: 秀麿指揮の第九での歌唱等関係も深く、戦
歌作曲の公募で「父よあなたは強かった」で一躍有名に
なった。昭和三十六年から四十八年まで日比谷公会堂で
毎月20日に行われていたの「みんなであうたう音楽会」を主
催、記憶の方もおいででしょう。

(立命館園歌初め多くの学校歌も手がけている)

拠点教会	4日号	11日号 (7日の合併号)	18日号	25日号
日本橋	手配り	手配り	手配り	直送
本 荏	手配り	手配り	手配り	直送
都 南	手配り	手配り	手配り	直送
三ツ木	手配り	手配り	手配り	直送
水豊田	手配り	手配り	手配り	手配り

時報手配り二月予定

品川支部例会

平成30年2月28日 (水) 11時開始

場所 南泰分教会

(品川区東品川一丁目二九の六)

*南泰分教会建物が新しくなりまして初めての例会会場となります

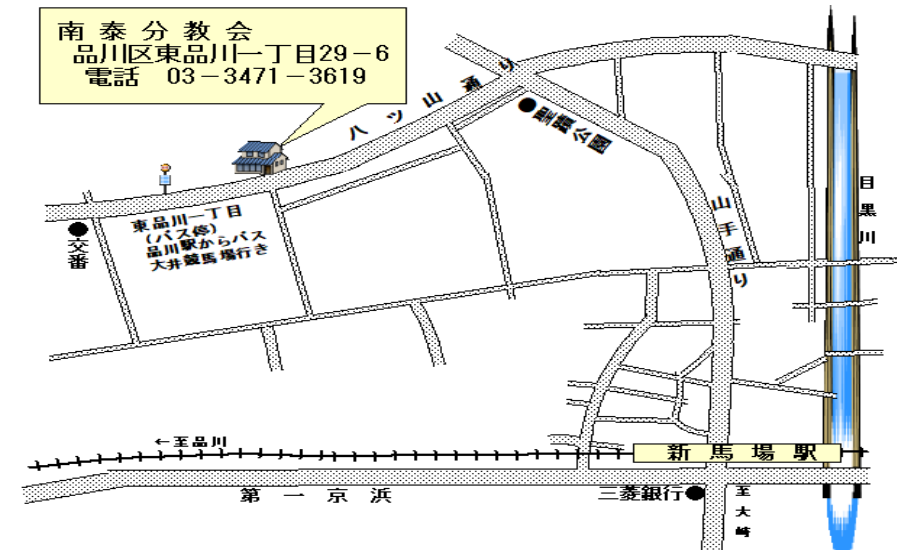
内容 おつとめよろづよ八首 二下り目

東京教区、支部連絡事項

当該教会長宮坂先生 挨拶

昼食の用意頂いてます

*各教会の方のほかどなたでも (白足袋ハッピー着用)



教会紹介

本品原分教会元一日



本品原分教会は、直轄が東本大教会、上級は本品分教会であり、既に設立五十有余年を重ねている。現在は、会長不在となっている。私は、二代會長であった祖母等からの伝聞でしか昔の事実を知り得ない。間違ったところもあると思われるが、お許し願いたい。

信仰の元一日は、祖父「兼次郎」祖母「みす」からである。先祖は鮫洲の漁師で、網元であったとのことである。不確かなことではあるが、黒船を率いてやってきたペルー艦隊に、水と薪などを運び込んだようである。祖父は寺子屋で学び、信心深く、御嶽山信仰に熱心で、山伏修行にしばしば出かけていたという話

を興味深く聞いた覚えがある。また、鈴ヶ森の刑場には、曾祖父・祖父の名前が刻まれた慰霊の碑が残っている。同じく鮫洲の八幡様にも、名前を確認することができるとある。漁師の生業は、祖父の代に既に海は汚れ、漁獲量は思わしくなく、浅草海苔に始まる海苔の養殖を行うことになったらしい。ところが、三年間の水温の上昇から海苔の養殖もままならず、網元としての漁業権を失う事となった。

その後の生活は、時代背景も手伝い、苦勞と困難の連続だったようだ。

初代会長を上級の奥様が就き、次会長に祖母「みす」が就いたと聞いている。当時としては、珍しくないが10人の子供を授かり、前述のこともあり、貧乏のさなか相当の苦勞をしたことは想像に難くない。

その上、目が不自由であり、幼い頃の私が手を引くことが自然と役割になっていった。

祖母の「助けて頂きたい」という神様にすがり、気持ちには本当にすばらしいものだったと回想できる。

そんな鈴木家であるが、入信理由は定かではない。父の歯痛からだと言ったこともある。不思議と本品を参拝すると、痛みが遠のいたという話だ。

お金など持ち合わせない祖母は、海できれいな石を拾い、それを磨いてお供えしたと聞き及んでいる。

真実の気持ちが届いたのだと思わずにはいられない不思議な守護があったのだらう。

三代会長は、母「壽枝」である。

母は幼い頃に骨膜炎を患い、その父である祖父が、仕事をなげうち入信し、実家に母を預け、六ヶ月間別科で修養したのである。

ここに、一切の都合を捨て去った姿・雛形を見ることができるとある。母は、天理教信仰者なら誰でもそうであるように、教祖の雛形をいつも念頭に置いて生活していた。

傍らに居る私は「もっと楽に、自分のことを考えて、自分の好きなことをすればいいんだ」と言っただけであった。

しかし母は、八十七歳でその生涯を閉じるまで、自分が描く教祖から離れることをせず、まさにひながたの道を辿っていたと思わずにはいられない。

今後の課題は、本品原四代目である。

「ようき暮らし」「一切の都合を捨てる」「人助けたら、我が身助かる」「天学」等々、尊い教え・ひながたをいかに実践していくかである。皆様には、今後の本品原分教会を暖かく見守って頂きたく、お願い申し上げます。